～倶楽部創立25年によせて～

＜その4：環境教育研究部会の成り立ち

倶楽部創立20周年記念誌より

里山里海

森林再生 母娘の夢熱く

大竹の松ケ原 ボランティアと整備

遊んで学んで 歓声響く

紅葉に染まる大竹市松ケ原町の雑木林に、手作りの丸太のベンチやテーブルが並ぶ。広島市を拠点に活動する森林ボランティアグループ、もりメイト倶楽部（130人）が整備している「松ケ原フィールド」だ。

フィールドの広さは約60㌃。地元の東田基子さん（70）が2007年4月から、もりメイト倶楽部に無償で提供している。この2年半余りで、約100平方㍍の広場に加え、遊歩道や丸木橋などができた。荒廃する山林を再生させる「森づくり」の活動を体験できる場になっている。

次女の会員山崎京華さん（40）＝山口市小郡高砂町＝が倶楽部のメンバーになったのがきっかけだった。京華さんにとって松ケ原の里山は遊び場だった。しかし、暮らしの変化に伴い、山林の手入れは行き届かなくなり、思い出深い場所は様相を一変させた。

あちらこちらで里山の森が放置され、荒れはてていた。何とかしなければ！ 京華さんは母の基子さんに、実家の山林を活用して「森づくりを学び、自然の豊かさを満喫できる場をつくりたい」と要望した。基子さんも二つ返事で応諾した。

倶楽部は、フィールドの整備を進めながら、地元や広島市の親子を対象に「森林体験教室」も開いている。

京華さんも「地元の人たちが里山の暮らしで培った知恵を授かりたい」と願う。8日の教室では、地元の農家からシイタケの原木づくりを学ぶ。

（川崎崇史）

伐採した木々を使い、鳥の巣箱やカブトムシの飼育小屋を作ったり、下刈りや間伐にも取り組んだり。学んで遊びながら、里山再生を進める試みだ。

基子さんも、京華さんたち倶楽部のメンバーの活動を後押ししている。これまで開いた9回の教室には、延べ約300人が参加。地元の女性たちと毎回顔を付け、取れたての野菜などを使った料理を振る舞っている。

いつもは静かな山がにぎわい、子どもたちの歓声が響く。高齢化が進む松ケ原地区。「この町のファンが一人でも増え、住んでみたいと思う人が現れたら」。基子さんは期待する。

「松ケ原に残る里山の知恵も大切にしたい」と語り合う基子さん（左）と京華さん親子

環境教育研究部会の成り立ち

『かねてから、当時の事務局長（現理事長）が子供への環境教育と、プログラム企画の立案ができる指導者等の人材育成の必要性から部会新設の構想を持っていた。この構想について、当時広報担当の東田京華氏に相談したところ、実家の大竹市松ケ原町に荒廃した山林を所有しており、子供の育成に貢献できるなら是非にと使用を承諾。東田氏を代表に部会を発足することになった。』左新聞は当時、東田氏とお母さまが取材を受けたもの。もりメイトキッズが今ここにあるのは、このフィールドがあってこそ。感謝！

『次世代への環境意識の啓発・発展のため、また自然との共生の素晴らしさ、個々の豊かなことにより、よりよい未来と社会を創るために、環境教育の必要性を切に感じ、環境教育研究部会の準備委員会を発足した。そして、2007年4月、総会にて環境教育部会の設立を提案、承認を得ることとなった。』今年、もりメイトキッズの活動は16年目を迎える。

環境教育部会の目指すもの　環境教育の必要性は、言うまでもなく地球的課題である。そのような社会的要求に応えて、森林体験を通して環境教育を提案することが、倶楽部の使命と考えている。

森林体験を通して環境問題に気付き、考え、「行動できる人」を増やし、指導できる人材育成を行う。

そのためには、運営スタッフのスキルアップが必要であり、森林・林業の実務はもとより、自然についての学習、環境教育アクティビティ(活動)などの情報を取り入れ研鑽する事が大切。講習会の実施や参加、情報源となる資料の購入も視野に入れていきたい。

子ども森林ボランティア。作業の様子

大竹は和紙で有名。紙漉の作業：2013年

環研部会話し合い。研修も行っている。

心ほぐしてくれる大学生のアイスブレイク

あつまれ～、みんなが作ったクラフトだよ

交代で食事を担当。

《歴代部会長　初代：東田京華(現賛助会員・岡山在住)　2代：竹原弘(現顧問)　3代：佐々木綾子》